

# 子ども中心の保育

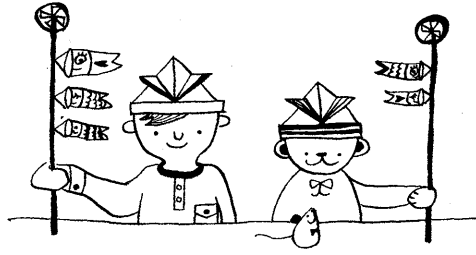
— 文化・社会・保育者により保育実践は異なる —

内田 伸子

「子ども中心の保育」では、子どもが主人公であり、大人は脇で支えます。保育者は、子ども一人ひとりの心理や生理の発達の視点から、子どもに寄り添い、ことばかけや援助します。子どものつまずきにはレールを敷かず、足場を用意するのです。

お茶の水女子大学附属幼稚園は、一八七六年に設立された日本で最初の幼稚園です。フリードリッヒ・フレーベルの思想を源に、近代幼児教育の研究者である倉橋惣三先生が、実践の場として、運営・発展させていきました。

その附属幼稚園で実践されてきた保育形態が、保育の質向上を図るためのモデルになり、やがて、全国で「子ども中心の保育」が実践されるようになりました。当時、保育者の計画に基づき活動が準備される一斉保育から、子どもの自発性を中心にして、保育者は脇で支えるという役割をとる、この保育形態を実践することの難しさが全国で指摘されました。しかし、少しずつ保育者の意識改革が進み、「子ども中心の保育」の考え方は現場で受け入れられるようになってきました。もちろん、意識改革はまだ十分に達成されているわけではなく、保護者のニーズに合わせて相変わらず保



育者主導の教育が行われている園もみられますが、日本の幼児教育において、子どもの自発性を大事にするという思いは行き渡っているといつてよいでしょう。

私は、一九八二年四月から一九八五年三月までの三年間、前記のお茶の水女子大学附属幼稚園で、堀合文字先生の保育を観察する機会を得ました。堀合先生は倉橋の保育理論を最もよく体現する実践家の一人として、全国から注目を集めていました。毎週金曜日の公開保育の日には、先生の保育室は観察者でいっぱいになりました。保育室ではまさに、堀合先生の「子ども中心の保育」が見事なまでに実践されていました。

「倉橋理論―堀合保育」では、子どもと保育者とが、**向かい合つて立ちます**。堀合先生は全身を耳目にして、子どものことばと体から、子どもの訴えを聞き、感じとります。腰をかがめて子どもの目の高さで耳を傾け、子どもの心の声を聴こうとしています。また、堀合先生は、子どもに向かつて「提案」のことばはかけますが、「禁止」や「命令」、「指示」のことばを発せられることはありませんでした。

そして、**保育者が少しだけ子どもの後ろを歩み、子どもがまずくと「足場」を用意するのです**。教導は、一番最後に、最も慎重に行わねばならない、との倉橋理論を保育室で実践しているのです。

しかし同じ原理に立ちながら、文化や時代、歴史の違いで保育のありようがまるで変わること気づいたのは、やはり「子ども中心の保育原理」を実践しているアメリカの幼稚園の保育を、一年間観察したときです。私は、一九九六―一九九七年にかけ

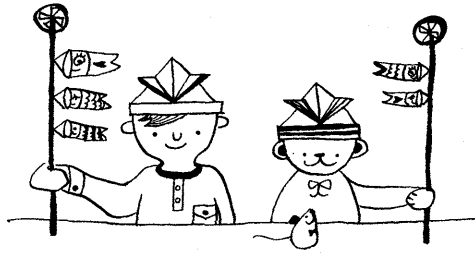
て、スタンフォード大学で附属幼稚園や附属小学校をフィールドとして第二言語習得の研究をしていました。附属レインボウ幼稚園ではジャン・ピアジェを源とし、コンスタンス・カミイとリタ・デブリーズの幼児教育の原理「子ども中心の保育」を実践していました。

文化の違いに気づいたのは、まず保育者の「立ち位置」です。アメリカの「子ども中心の保育」では、子どもと保育者とは横並びで立ちます。保育者が少しだけ先に歩み、子どもがつかまずくと、「教導」（教え導く営み）を組み込み、進むべき方向を示します。

このように、「対人関係の準拠枠」が自己自身にあるアメリカと、周りの人々との関係に準拠枠のある日本などでは、子どもの自律性の育み方が異なるのではないかと思われます。

スタンフォード大学附属小学校に子どもを通わせている母親に、子どもにどのようなことをかけるかを尋ねてみました。アメリカの母親たちのことばかけのベスト3は、まず「あなたは自分の意見が言えたか」、次に「あなたはクラスに貢献できたか」、第三に「あなたは楽しんだか」、です。ともかく、自己自身に準拠して振る舞うことがよいとされるのです。

ところが、日本や韓国、台湾の母親は、まず「みんなと仲良くできたか」を気にしているようです。東アジアの儒教的精神の影響を受け継いでいる文化では、年長者や



他人に配慮して自分の振る舞い方を決めることがよいとされ、自分の思いだけで行動することは慎む傾向がみられ、子どもはなかなか自己決定ができず、自己主張もしにくいのです。

ですから、幼児期から自分で判断・決定する力や思考や社会的な自律性を育てるためには、大人が最初から進むべき方向性を示してしまうと、自己決定ができない「指示待ち族」になってしまう危険があります。このようなことから、保育者は子どもがつまずいたら、足場を掛けるだけでそれ以上行くべき方向を先回りせずに、子どもの自立を尊重して、指示しないのです。保育者は、子どもの視野を広げ、さまざまな選択肢があることを示唆しなくてはなりません。そうして、子ども自身で進むべき道を選ぶ機会を増やすことが必要になるのです。

つまり「子ども中心の保育」の原理は、文化・社会の中で築かれた対人関係や人間観に基づいて、実践のありようが異なるのではないかと思われれます。

保育は「生きもの」です。実践される地域の文化や社会、実践する保育者の持ち味により、さまざまな現れ方をするのではないかと思えます。

保育者は子どものことばを全身で受け止め、心を込めてことばをかけるのです。この営みの中でこそ、子どもは自己充実ができます。子どもが充実して一日を過ごせるように、保育者は常に研鑽し、保育力・教育力を磨いていく必要があるでしょう。

(お茶の水女子大学)